

第31回防衛問題セミナー開催概要

開催日時：平成28年3月14日（月）1830～2030

開催場所：チトセピアホール（長崎県長崎市）

メインテーマ：世界で求められる自衛隊～キャパビル&ウィメンズパワー～

■ 第1部（講演）

テーマ：「能力構築支援とは
～Capacity Building～」

講師： 防衛省大臣官房参事官 林 美都子

■ 第2部（講演）

テーマ：「私たちの海外派遣活動記録
～誰かの笑顔のために～」

講師： 陸上自衛隊研究本部 訓練センター
中川 美佐 2等陸佐
航空自衛隊航空幕僚監部
壹岐 香里 2等空佐



開演の挨拶を行う
長谷川 邦之 九州防衛局総務部長



林 美都子 防衛省大臣官房参事官



中川 美佐 2等陸佐



壹岐 香里 2等空佐



講演風景

《セミナー概要》

3月14日（月）、長崎県長崎市の「チトセピアホール」において、「世界で求められる自衛隊～キャパビル&ウィメンズパワー～」と題し、九州防衛局主催の『第31回防衛問題セミナー』を開催しました（来場者約220名）。

はじめに、主催者を代表して長谷川 邦之 九州防衛局 総務部長の挨拶の後、第1部は林 美都子

第31回防衛問題セミナー

防衛省 大臣官房参事官、第2部は陸上自衛隊研究本部 訓練センター 中川 美佐 2等陸佐、航空自衛隊 航空幕僚監部 壹岐 香里 2等空佐による講演を行いました。

第1部では、“能力構築支援とは ～Capacity Building～”をテーマに、平成24年度から実施している能力構築支援について、本施策の背景、目的、実施状況及び今後の方向性等を説明しました。

第2部では、“私たちの海外派遣活動記録 ～誰かの笑顔のために～”をテーマに、東ティモール（PKO）やインドネシア（国際緊急援助活動）等で活躍された女性自衛官（2名）が、派遣先の国の情勢及び現地での活動内容等、自らの経験談を説明しました。

今回のセミナーには、多くの方に来場していただき、来場された方々からは、「諸外国に対して能力構築支援を行い、様々な援助を行っていることを知る良い機会であった。」、「女性自衛官の力強さを感じ、非常に誇らしく感じた。」、「今後も機会があれば積極的にセミナーに参加したいです。」などの感想が寄せられ、好評いただきました。

九州防衛局では、防衛省の諸施策や自衛隊の活動について、より多くの方々に理解していただけるよう、今後も各地で防衛問題セミナーを開催していく予定です。

第31回防衛問題セミナー

平成28年3月14日（月）

【司会】

お待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまより第31回防衛問題セミナー「世界で求められる自衛隊～キャパビル&ウィメンズパワー～」を開催させていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます九州防衛局地方協力確保室長の鶴田と申します。よろしく申し上げます。

本日は、受付でお渡ししました式次第に沿って進行させていただきます。

まず始めに、主催者を代表しまして、九州防衛局総務部長 長谷川邦之よりご挨拶させていただきます。

【長谷川総務部長】

皆様、こんばんは。九州防衛局総務部長の長谷川と申します。本日はご多忙中のところ、防衛問題セミナーにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

この防衛問題セミナーは、防衛省・自衛隊の施策や活動につきまして、皆様にご理解いただきたく開催しておりまして、今回で31回目、ここ長崎市においては2回目の開催となります。

さて、本日の防衛問題セミナーのテーマですが、世界で求められる自衛隊ということで、防衛省から林大臣官房参事官、そして陸上自衛隊研究本部から中川2等陸佐、航空自衛隊航空幕僚監部から壹岐2等空佐をお招きしまして、お話をさせていただきます。

皆様ご承知のとおり、我が国を取り巻く安全保障環境は、大変厳しい状況であります。北朝鮮において、1月には核実験が行われ、2月には長距離弾道ミサイルの発射、そして今月に入りまして短距離弾道ミサイルが発射されるという状況であります。また、東シナ海、南シナ海におきまして、中国の活動は依然として活発な状況であります。さらに、航空自衛隊においては、スクランブルが毎日のように行われているという状況であります。

防衛省・自衛隊は、従前より各国との協力、交流が大切と考え、様々な活動を行ってきたところであります。本日は、そのような活動の一つである能力構築支援、そして女性自衛官の海外派遣活動について、講師の皆様からお話をいただきまして、防衛省・自衛隊の活動について皆様のご理解をいただければと思っております。

講演の後に質問等のお時間も用意しておりますので、皆様、最後まで傾聴の程お

願いを申し上げまして、挨拶とさせていただきます。本日はよろしく申し上げます。

【司会】

第1部は「能力構築支援とは～Capacity Building～」と題して、防衛省大臣官房林参事官によりまず講演です。林参事官、ご登壇願います。

講演に先立ちまして、林参事官の経歴をご紹介しますと、平成5年に防衛庁に入庁し、その後、地方協力局地方協力企画課企画調整官、在英日本国大使館防衛担当参事官などを歴任され、平成27年、現職であります大臣官房参事官に就任されております。

本日は、平成27年度より実施している新しい施策であります能力構築支援について、本施策の概要及び実施状況等について講演をお願いしております。それでは林参事官、よろしく申し上げます。

【林参事官】

皆さん、こんばんは。本日は、御来場いただきましてありがとうございます。防衛省で大臣官房参事官をさせていただいております林と申します。

大臣官房参事官というポストは、去年10月に新しくできたポストでして、総理が外国に行かれる際に防衛省の担当者として随行したり、今日話をさせていただきます能力構築支援ですとか、今、国際的に活動を広げているものについて、総括的に見る立場として新しく設けられた役職です。

私も去年10月からこの仕事をする事になり、それまで能力構築支援というのは、誰が何を何の為に行なっているのかよく理解していませんでした。仕事をしていくうちに、これはすごく奥が深い、本当にこれが今まで防衛省がやりたかった各国との国際協力だなと感じている次第です。今日は、そういうことをご説明できればと思っています。

また、長崎については、私は93年に防衛庁に入庁し、新人研修で佐世保に行ったり、またその後、友人が長崎の県立大学に就職するということがあり、当時、まだ大学の名前を募集中で、私も大学の名前を書きました。結果、長崎県立シーボルト大学になったということで、だめだったんですけども、長崎にも何回か遊びに来ておりました。

古くから造船所があり、歴史的にも古い街で、こういうところで我々の取り組みを説明できるというのは有難いと思っております。

「何故、防衛省を選んだんですか」とよく聞かれますので申し上げますと、私が入庁したのが93年なんですけれども、92年に自衛隊がカンボジアにPKOに行きました。たまたま、そういうことを聞きまして、新しく変わっていくおもしろい役所なんじゃないかなと思い、第一希望で防衛省の門をたたき入省し、それから国際関係の仕事、地方防衛局の仕事等、20年近く仕事をしてきました。

今日は、防衛省がどういう風に国際貢献をしてきたかという歴史を振り返りなが

ら、新しくて古い意味合いもある能力構築支援について理解していただければと思っています。

最初に、自衛隊の知見・活動ということで、92年から防衛省が行ってきております国際貢献について、おさらいをさせていただいた後に、こういう知見があるので能力構築支援を行なっていますという話につなげさせていただければと思います。

例えば、今朝のNHKのニュースで、防衛省の職員がベトナム軍をニューヨークに連れていき、PKO活動のいろいろな要領について教えましたというのをご覧になった方もいるかと思います。なぜ、今、自衛隊がそういうことをやっているのかというのが、後の能力構築支援につながってきますので、説明させていただきます。

まず、国際平和協力活動ですけれども、これは自衛隊が92年にPKOに行ってから今まで、いろいろなところでも取り上げられていますので、自衛隊がPKOに行っているというのはご存じの方も多いと思います。92年に行ってから、アジア、中東アフリカ等で、30を超える活動をしています。延べ人数も4.2万人を超えております。どの国も一国では自分の国の平和と安定を守ることはできません。何か支援が欲しい国があったとき、自衛隊は我々の法律にのっとって国際的な活動をし、それが評価されているということです。

日本は特に資源がなく、貿易に頼っております。このような国にあっては、どこの国の不安定な状況も、我々の生活に直結するものとして、92年から国際平和協力活動に関わってきているということです。見ていただきますと、広く活動しているのがわかると思います。国連のPKOだけではなくて、国際緊急援助活動、イラクの復興支援活動、テロ対策の為の補給活動等が行われてきています。

昨年は平和法制がありまして、自衛隊のこれからの活動について国会でもいろいろな議論があったことを皆様もご存じだと思います。かつては、イラクの復興支援活動やテロ対策活動には、それぞれ法律をつくって派遣しておりましたけれども、平和法制が通り、一般的な法律を整え、国会の承認を得た上で、最初にどのようなことができるかという枠組みができたのが去年の動きであります。

こういう活動を通じて、自衛隊の国際貢献については、とても支持が高くなっております。例えば、内閣府が行っている国民の世論に関する調査ですけれども、1993年は支持率が48.4%だったのが、2014年には89.8%まで上がっています。

代表的なものからいきますとカンボジアのPKOが、日本の国際平和維持活動の始まりです。先ほど申しましたように、私が防衛省を選んだ一つのきっかけです。

当時、カンボジアはPKOを受け入れる国だったのが、今やレバノン、マリ、南スーダンなどへPKOを提供する国に変わっています。この二十数年で、カンボジアはそこまで変容することができました。その国造りに自衛隊も関わることもできたというのは、地域の一員として、とても有意義なことだったと思います。

今も親日国ですし、私自身、いろいろなところに出張することが多いんですけれ

ども、先月、カンボジアに行ったときには、歴史博物館に自衛隊の活動について書かれておりました。困ったときに助けてくれた国というのは、その国の歴史にも残るとのことだと思えます。

カンボジアはPKOの発端になっていますけれども、日本は他にも遠いアフリカにも行っています。モザンビークのPKOでは輸送調整、ルワンダという国では衛生部門の支援として、お医者さんが行って、治療などもしておりました。あと、ゴラン高原では停戦監視兵力の引き離しのために、司令部要員や輸送部隊が派遣されておりました。1996年から2013年ということで、最も長いPKOでありました。今般のシリアの情勢悪化で、今はPKOから撤収しております。

次に、東ティモールのPKOです。これも自衛隊が600人以上の部隊を派遣した大型のPKOとして位置付けられます。今、世界の国は196カ国ありますが、21世紀になって初めて東ティモールがポルトガルから独立したわけです。自衛隊から680人程を派遣して、各国のPKO部隊のための道路や橋を造りました。

折しも、今日、東ティモールの大統領が訪日しております。東京で安倍総理に会い、中谷大臣にも会う予定になっています。東ティモールからは防衛大学にも留学生が来ており、当時支援をしてくれた国として、日本をとっても重要な国と位置付けてくれています。

2002年に私は陸上自衛隊の予算を担当しております、東ティモールにPKO派遣をするための予算を確保したり、支援物資の調達の仕組みをつくることに関わっておりました。東ティモールのPKOのために64億円位の補正を確保し、民間のトラックやショベルなど、活動に必要なものを買いました。自衛隊が行って道路などを造ったんですけれども、任務が終わって引き上げる際に、使った車両は東ティモールの国造りに大切なものなんじゃないかということで、東ティモール側に譲渡してくるという枠組みをつくり、その調整のために行ってきたものです。

東ティモールでは、橋を造ったところに日本が造りましたよというのを残したり、車に日本のマークをつけて譲渡してきました。これは、自衛隊がPKOで行って相手の国に車両を寄附してくるという初めての仕組みでした。

現在、能力構築支援の仕事をしており、去年の11月に東ティモールを再度訪れることができました。そのときに、あの車両はどうなっているかが気になりまして、JICAの人やいろいろな方と連絡をとったところ、我々が置いてきた車両は、東ティモールの災害等を担当する省庁で要の車両として生かされているという話を聞きました。そういう国の繋がりが、十数年続いているなということで、とても嬉しく思いました。

次に中東についても、イラクの復興支援には陸・海・空の自衛隊が行きましたし、アフガニスタンにも難民救援に行っています。そういう国造りをしています。

PKOについて代表的なものに触れてみましたが、今、現実に行なっている活動が最後の南スーダンのものです。南スーダンでは、避難民の基地の造成や幹線道路の補修、排水の整備、防護柵の設置などの活動をしています。今活動してい

るものということであれば、南スーダンのPKO以外にも、海賊対処として海上自衛隊がジブチでも活動しています。

ということで、これまで自衛隊は、すごく広いところで、衛生や道路をつくる施設分野、輸送分野など、いろいろな部分で活動してきたのがわかるかと思います。

次に災害の関係です。お伝えするまでもないことですが、日本は気候も様々で、土地も3,000kmと長いです。私がイギリスに防衛担当参事官として3年間行っているときに、イギリスからヨーロッパの距離をすごく短く感じて、日本って実はすごく大きいんだなというのを実感しました。

例えば、今日、東京から長崎に来るのに、飛行機に1時間45分乗ってきたんですが、これをロンドンからで考えますと、フランクフルトとかミラノとかチューリッヒとか、ヨーロッパの内陸の方まで行けます。それが東京から長崎までの距離です。北海道から沖縄までの距離では、ストックホルムからスペインのマドリードより南方まであります。すごく大きい列島ですので、当然、色々な気候による災害も起こります。また、島も約7,000島近くあるという複雑な地形ですので、色々な災害に対しても脆弱だと思います。地震、雪害、土砂崩れ、台風など、色々な災害があります。これに自衛隊は今まで関わってきているわけです。

5年前になりますけれども、東日本大震災では、自衛隊の半分近くの約10万人が参加し、原発も含めて活動してきました。人命救助は当然のこと、入浴支援や給水支援などをやってきました。この能力はそもそもあったわけではなくて、阪神大震災のとき、私も防衛省におりましたけれども、なぜ自衛隊が出て消火活動をしないうのか、なぜ救出できないのかと、皆様から厳しい批判をいただきました。

それから防衛省は、法律が変わったことを受けて、また、我々の方針の大綱や政治的な政策も明確になりまして、災害救援の能力を高めてきました。東日本大震災や去年の御嶽山の噴火のときも、大変高い山での活動で、灰に足がとられるようなところで活動するには、ヘリコプター能力のある自衛隊が必要ということで救援に向かったわけです。

内閣府が行いました調査を見てみますと、災害救援活動を支持する割合が1995年は88%だったのが、2014年には98%と、ほぼ100%の国民の方に自衛隊の活動を支持していただいています。この能力をもって国際緊急援助活動を行ってきました。先進国の中で、これほど災害がある国は珍しく、また、これほど能力がある国も珍しいということです。特にアジア太平洋地域は、同じく台風など、色々な災害があります。これに対して、自衛隊は国際緊急援助活動を行い地域の安定に貢献してきたわけです。

1999年に、国際緊急援助活動法で自衛隊が、この活動に参加するように法律が変わりまして、18カ所の国際緊急援助活動をしてきました。最近で言えば、2013年にフィリピンで台風の災害があったんですけれども、それに対して日本からは、海上自衛隊の艦艇、航空自衛隊の飛行機、総勢1,000人以上の隊員が行きまして、防衛省史上最大のオペレーションとなる救援活動を行いました。この際、

10カ国から同じく支援に来ていたんですけれども、中でもヘリコプターの能力やヘリコプターを使える船を持っていたのは、日本とアメリカとオーストラリアとイギリスだけでした。こういう地域において、自衛隊が今まで災害救援で培ってきた能力を生かして、国際的な災害に対応しているというのが現状です。

昨年、安倍総理がフィリピンを訪問された際にも、首相レベルの方として初めて大統領の私邸に呼ばれるほど、フィリピンと日本との関係はとて進んできています。こういう自衛隊の活動を、フィリピンからとても評価していただいております。ここまで、自衛隊が92年から行ってきましたPKOや災害救援について、おさらいをしました。

これから、今日のポイントであります能力構築支援について話していきたいと思っております。

今、安倍総理は積極的な外交ということで、我々自衛隊だけではなく、色々な能力を生かして各国と関係を築いていくことを、とても積極的にされております。能力構築支援もその一つとして、東南アジアの国に行かれるときに、総理はいつも「能力構築支援」、「ODA」、「防衛装備・技術協力」、その三つを組み合わせることでアジア太平洋地域との関係を構築していきたいとおっしゃっています。

能力構築支援というのは、防衛省のブランドだと自負しているんですけれども、防衛省・自衛隊が我々の能力を使って相手の能力を向上させる活動です。事業の意義とありますけれども、平成24年より開始しています。関係国の軍・軍関係機関の能力構築を支援することを目標とし、これが国際社会の平和と安定に資すると位置付けています。また、後にも出てきますけれども、アメリカ、オーストラリアなど、他の支援実施国との連携も考慮しています。

先程から申していますように、自衛隊は人道支援、災害救援、PKOなどについて、国内外から高い評価を得ている能力を持っています。その能力と関係国が向上したい目標とをマッチングさせて事業を行って来ています。

難しい話になりますけれども、政策的に根拠のある事業ということで説明をさせていただきます。安倍総理になりまして、国家安全保障戦略というのが定められましたけれども、ここでも安全保障関連分野でのシームレスな支援を実施するため、これまでのスキームでは十分対応できない機関への支援も実施できる体制を整備するとされています。

また、我々防衛省の政策の根幹となります防衛計画の大綱でも、能力構築支援は今後の安全保障環境の安定化、二国間の防衛協力強化に有効な取り組みであるとし、関係国との連携を強化して能力構築支援の対象国及び支援内容を拡充していく、アジア太平洋地域における安定を積極的、能動的に創出し、安全保障環境の改善を図るものとされています。

5年毎の計画であります中期防衛力整備計画でも、自衛隊がこれまでに蓄積してきた能力を有効に活用するため、効果的かつ効率的な能力構築支援の実施に努めますと明記されています。

我々はこれに基づきまして、4年前に能力構築支援を具体的に開始いたしました。この能力構築支援は新しいものですが、ASEAN諸国との関係で防衛省が最も重視している協力分野の一つです。毎年、アジア太平洋地域の国々の中で、シャングリラ・ダイアログというシンガポールで防衛大臣、国防大臣が集まる会議があります。そこでも、昨年、中谷大臣がアジア太平洋地域の安全保障協力推進のための三つの方針を述べまして、「海・空における共通のルール法規の普及」、「海・空の安全保障」、「地域における災害対処能力の向上」、この三つの方針のために、海洋学、潜水医学、海洋安全保障能力の強化など、HA/DR、災害救援の能力の向上のためのプロジェクトを実施するとお伝えしています。

具体的なやり方は、自衛官を一定期間派遣し、教育訓練を実施したり、短期的なセミナーを実施したり、もしくは向こうからの研修員を受け入れたりというようなことをしています。私がいます防衛局に能力構築支援室というのを作りまして、体制を立ち上げて、そこが計画、方針、資金を確保し、陸・海・空のそれぞれの部局と調整を図りまして事業を実施してきています。

これまでの取り組みのイメージを載せていますけれども、過去4年間で10カ国、東南アジアだけでも40事業以上のものを行っています。カンボジア、東ティモール、インドネシア、モンゴル、マレーシア、ミャンマー、パプアニューギニア、フィリピン、ベトナムとやってきました。これだけいろいろな国との交流を行なっていますので、能力構築支援に携わる者は事前にいろいろな注射を受けています。肝炎や狂犬病など、いろいろな注射を受けて、いつでもどこでも支援に行けるような体制をとっています。現実、私たちスタッフは、毎週二つ、三つ程の事業を継続してやっており、全員が一概に一緒にいるということができず、これから年度末を迎えて送別会とかをやりたいなと思っても、全員が揃うことがないほど、みんな飛び回ってこの事業をやっております。

例えば、陸上自衛隊は施設学校や輸送学校、海上自衛隊の場合は潜水医学実験隊と、それぞれの専門家のいる部隊と協力して事業を行ってきています。

これで見てくださいと、どういう事業がどういうふうに始まったかというのが分かると思います。ポイントといたしまして、東ティモールとカンボジアは、2012年に我々が事業を始めた当初から、一番初めの事業として3年間のプログラムをやっています。これはとても意義のあることだと思っております。先ほど申しましたように、東ティモールとカンボジアは自衛隊がPKOで行って関係が強い国です。そういう国とPKOで培った関係を、能力構築支援に受け継いでいけるという面もあると思っております。

私自身、安倍総理が昨年10月にモンゴルと中央アジアに出張したときに随行させていただきまして、例えばモンゴルも長いプロジェクトをやっている国として、総理と大統領との間で、「この能力構築支援を継続していきましょうね」という合意をしています。先々週、モンゴルの担当局長が来られたときに、「魚をもらうよりも、魚のとり方を教えてもらうほうがうれしいです」と言われていました。モン

ゴルには海がないんですけれども、やはり物を貰うより、やり方を教えてもらう方がその国の発展に繋がるんですというような話をされていました。

先週、カザフスタンとウズベキスタンに総理の訪問のフォローアップとして行ってきたんですけれども、日本が災害やPKOで国際的にとても評価されているのを、まだ関わり合いの少ない中央アジアのカザフスタンとウズベキスタンの方々も知っておられまして、そういう分野で支援をしてもらえないかというようなことを言われています。

色々な国が支援を要望されるんですけれども、やはり難しいのはマッチングです。1回日本の旗を立てたら、それをずっと継続していくというのを心掛けるようにしています。先月、ラオスで能力構築支援のHA/DRを開始しました。これは災害救援の仕方を教えているんですけれども、どのように続けていくかというのも、事前にラオスと調整しながら行なっています。

どんな感じで行われているのか、各自衛隊の取り組みのイメージを説明させていただきたいと思います。

例えば、カンボジアは、3年がかりで能力構築支援を行っている対象国です。最初は測量の仕方を教えて、25年は砂利の敷き方を教えて、26年は道路構築について実習して、それを踏まえて、今はカンボジアからレバノンやマリの国連のPKOミッションへ派遣されているということです。PKOを受け入れる国だったのが、プロバイダーへと展開していくということで、地域の発展が更に国際的な貢献に繋がっている例だと思っています。

次に、海上自衛隊ですけれども、ベトナムでは、ダイビングをしたときにどういった医療的なケアが必要かという部分、潜水医学について、日本から教えてもらいたいということで、ベトナムの海軍潜水医学センターを設立しようとしています。これに向けて、3、4年がかりで支援をできています。この途中、25年に日越米豪の専門家交流なども実施しておりまして、ベトナムだけではなく、アメリカ、オーストラリアも呼びながら、地域全体で支援をしていくというやり方もしています。

次に、航空自衛隊です。航空自衛隊については、昨今のいろいろな状況で、この地域に国際法の理解を安定させるのも大きな意義があることだと思っています。航空自衛隊の専門家によって、公空上空の航行の自由をはじめとする国際法や領空侵犯などのセミナーをしています。これは、ベトナム、マレーシア、インドネシア、フィリピンとリージョナルツアー的に実施してきており、この先、東南アジアの他の国に対しても、同様にセミナーを実施していく予定です。ですので、一つの国に深掘りして4年、5年事業をやるものもあれば、セミナーを各地域でリージョナルツアーしていくというやり方もあります。

ここからは、参考に資料を配布させていただいておりますが、どんな感じのものがあるかを載せています。

例えば、東ティモールでは、先程、PKOで車両を贈ったという話をしましたがけれども、車両の整備を教えており、物をあげても、それをメンテナンスできなけれ

ばその意義はありませんので、今も東ティモール軍に対して車両整備の研修をしています。自衛官が2週間程向こうの車両学校に指導に行き、工具の置き方から全て教えています。

次に、モンゴルですけれども、PKOに資するものとして、道路の造り方と病院の支援などもしています。今、モンゴル軍が新しい病院を建てようとしていまして、その病院をどのように運営すればいいのか、カルテの仕組みはどうすればいいのか、診療科をどのように設置すればいいのかなどの管理の仕方を教えています。

ベトナムについては、今朝ニュースがありましたPKOに関するものです。ベトナムは、今までPKOに部隊派遣していませんが、今年中にはPKO派遣したいと言っており、防衛相会談でやり方がわからないというお話がありましたので、PKOに対する協力ということで覚書を結びまして、その一端として、ニューヨークの国連代表部で、手続きやどういうものなのかということ、今まさに能力構築支援しております。また、飛行安全や航空医学などもありますので、後で資料を見ていただければと思います。

インドネシアでは、海洋学とか海図の作成などについても関わっています。インドネシアで津波の被害があったのを覚えていらっしゃると思いますけれども、そういう災害を未然に防ぐためには、海洋について理解することが重要であり、海洋の技術を教えています。

ミャンマーについては、陸・海・空全部、それぞれ能力構築支援している珍しい国なんですけれども、これもHA/DR、災害救援、航空気象分野など、色々なことをやっています。

フィリピンも同じです。この国も災害が多い国ですので、物料投下、災害支援物資をどのように落とすのかなどの能力構築支援もしています。

パプアニューギニアは、2018年にAPECの議長国になります。各国から要人が来ますので、軍楽隊を結成して要人をお迎えしたいという構想を持っています。実際には、まだ軍楽隊がないため、ぜひ日本に教えてほしいという話があり、先週、パプアニューギニアから将来の軍楽隊の候補者がやってきまして、朝霞にあります中央音楽隊で指導を受けているところです。

国家行事のAPEC会議に日本が関与できるということで、私も2018年に各国要人が来た際に、パプアニューギニアの軍楽隊が晴れ晴れしく活動している姿を思い浮かべています。軍楽隊要員のリクルートから始まり、軍楽隊の音楽もまだなく、そういうのも中央音楽隊でつくっていくという1歩、2歩のところから、2018年に向けて始めているところです。

かつて明治維新のときに、日本もイギリスから軍楽隊の色々な音楽を学んだ際、リズムがとれなくて大変だったというのを音楽をやっている知り合いから聞いたことがあります。同様にパプアニューギニアが、国家的な行事に参加できるような軍楽隊を持つことを支援できるというのは、日本とパプアニューギニアだけでなく、APECの中でもすごく意義のあることではないかと思っています。

ラオスについては、先月初めてHA/DRのセミナーをして、すごく関心が高く、70人程の人々が集まって、多くの質疑がありまして、まだまだこれから進んでいかななくてはという感じです。

今、日本がどういう支援をしているかをお伝えしましたがけれども、この地域で能力支援活動をしている国は、他にも幾つかあります。

その一つはアメリカです。アメリカにつきましては、「2+2」や防衛相会談でも、「ぜひ日本と協力して東南アジアの国に対しての能力構築支援をやっていきましょう」ということで合意しています。

二つ目のオーストラリアにつきましては、地理的にも東ティモールなどの南方の国に対しての能力構築支援を40年以上やっています。日本は東南アジアを重視し、オーストラリアは南方を重視していますが、「互いに協力をしていきましょう」ということで、防衛相会談でも合意しています。

また、今年1月にイギリスと「2+2」という外務防衛閣僚級協議をした際に、イギリスも東南アジアに関わるに当たって、日本と能力構築支援についての意見交換をしたいと、どういうやり方をしているか教えてほしいということがあり、防衛大臣会合でもワーキンググループを設置しようということ合意しています。

例えば、他の国とどういう連携をしているかということですがけれども、オーストラリアは、東ティモールに近いということもあり、随分重視しています。オーストラリアが計画を立てて、軍の宿舎や教場などの建物を造っております。それに日本とアメリカも一緒に参加して、4者の合同事業として、東ティモール軍の建設部門での能力構築支援をしています。

あとイギリスとも、今年1月に初めて、災害救援についての教訓を共有するための能力構築支援をしました。

今後の方向性は、この地域では災害などいろいろなことが起こりますし、国際法を根付かせることが必要であったり、課題がまだまだあります。ですので、能力構築支援の意義がますます高まっており、それが政策的にも政治的にも注目されているということだと思います。

そういう意味では、今後実施していく支援としましては、海洋安全保障の分野や外務省のODAでの支援、海上保安庁など、他の省庁がやっているものとの連携、また、防衛省も技術協力などを始めましたので、そういうものとの連携、あと、アメリカ、オーストラリア、イギリスとの連携など、「連携」をしていくことが大切だと思っています。

あと、新規国である中央アジアとどうしていくかなど、戦略的な情報発信です。私自身も去年10月にこの新しい部署につくまでは、能力構築支援が何をしているか、あまり意義を理解できていませんでした。今日は、こういう機会をいただいて、お話をさせていただいたり、今までの実績がわかるようなリーフレットも作っています。また明後日は、アジア太平洋地域の国、25カ国の局長クラスを招きまして、東京ディフェンス・フォーラムを行います。そこでも能力構築支援について協議

をしていく予定です。

最後に、能力構築支援は92年から始まりました、自衛隊が培ってきたPKOや災害救援の能力を、より継続的に各国との関係を構築できるものとして能力構築支援があると思っています。能力構築支援をすることによって、一緒にかかわった隊員達は、本当にチームのようになりますし、その経験がまた、局長級、大臣級や総理のところでも、「あなたの国はこういうことですね」とか「こういう支援ができますね」という話につながっていきます。今、防衛省が国際貢献できる色々なツールを与えてくれているところにも、能力構築支援の意義があると思っています。

思い起こせば、明治維新のときに日本はイギリスからいろいろ学びましたけれども、長崎というのは造船の場所でもありますし、日本が発展していく中で、各国からの技術を更に発展させて日本の技術にしてきたという土地だと思います。今回、そういう長崎で技術支援、能力構築支援の話をしていただいて、ありがとうございます。

この後に質疑応答の時間もあるということですので、この能力構築支援についてお話ができればと思っています。今日は、どうもありがとうございました。

【司会】

林参事官、どうもありがとうございました。

ここで休憩の時間をとらせていただきます。第2部は、19時30分から始めますので、それまでに今のお席にお戻りくださいますよう、よろしくお願いいたします。

(休 憩)

【司会】

皆様、お待たせしました。定刻になりましたので、第2部講演に移らせていただきます。

近年、女性自衛官は増加傾向にありまして、かつ、最近報道されたように海自護衛艦の艦長に初めて女性自衛官が就任するというように、活躍の場も拡大しております。

本日は、そのような女性自衛官の活躍の状況の一部でもご紹介したいと考えまして、第2部は「私たちの海外派遣活動記録～誰かの笑顔のために～」と題して、自衛隊によるPKO国際平和協力業務及び国際緊急援助活動等において海外派遣を経験されている女性自衛官2名の方に講演をお願いしております。

最初は、陸上自衛隊研究本部総合研究部教訓センターの中川2等陸佐によります講演です。中川2等陸佐、ご登壇願います。

まず、簡単に中川2佐の経歴をご紹介しますと、平成元年に陸上自衛隊に入隊し、内閣府PKO事務局、陸上幕僚監部防衛課等で勤務され、平成25年より現職であります陸上自衛隊研究本部総合研究部教訓センターで勤務されております。海外派

遣としては、シリアや東ティモールでのPKO、国際平和協力業務等でご活躍をされています。それでは中川2佐、よろしく申し上げます。

【中川2等陸佐】

皆さん、こんばんは。ただいま紹介にあずかりました、陸上自衛隊の中川です。本日はこのような場を与えていただきまして、ありがとうございます。皆さんの前でお話できることを大変光栄に感じております。

私自身は、長崎はほとんど初めてでありまして、歴史あるところを歩くのが大好きですので、本当は今すぐにでも出島のあたりをちょっと歩いてみたいなどか思っておりますが、そのようなはやる気持ちを抑えまして、本日は、私たちの海外派遣活動記録ということで、これまでに国際平和協力で、色々経験させていただいたこと、勤務したことについて、20分程度でご紹介させていただければと思います。よろしくご清聴をお願いいたします。

本題に入る前に、私がどのような人物かを簡単に紹介したいと思います。89年、平成元年に、防衛大学校ではなく一般の大学を卒業し、陸上自衛隊に入りました。皆様ご承知のとおり、当時はバブル経済真っ盛りで、公務員人気は底辺という中で、みんなに、どうしてだ、なぜだと言われながら、元年に陸上自衛隊に入りまして、約25年を終えたところでありまして。

この間に、ここに書いてありますとおり、部隊でありますとか、陸上自衛隊の中の学校、機関をいろいろ経験させていただきました。変わったところでは、平成12年から14年まで2年間、内閣府PKO事務局というのがあります。PKOの政策を担当する組織で、ここに2年ほど自衛隊と防衛省から出向という形で勤務をさせていただいたのが、まず一つ特色のあるキャリアです。

それからもう一つ、アメリカ本土のペンシルベニア州に、アメリカ陸軍が持っております平和維持安定化作戦研究所がございますが、ここに一昨年の夏まで約2年半派遣されて、研究業務等々を行ってきたという経歴がございます。先程の林参事官のお話に絡みまして、紹介させていただきますと、「PKSOI」と呼ばれているこのアメリカの研究所は、少しですけれども、米軍のキャパビル、能力構築支援にも関わっておりまして、私は派遣されている日本人として、自衛官として、彼らの仕事を見ておりました。

ここの機関自体は、皆様もニュース等でよくご覧になったと思いますけれども、いわゆるイラクとかアフガニスタンで米軍がやっておりました作戦を、主に研究したり、企画したりするところだったんですが、米軍の経験を生かして、支援される国の軍の戦闘力の向上のため、主に軍事訓練が彼らのキャパビルでした。

中から見ている限りでは、米軍というのは、イラクとアフガニスタンで、自分たちのやり方を押しつけると反感を買ったり、うまくいかなかったりするという経験をたくさんしました。そのことを教訓に、あまりアメリカの価値観を押しつけないということに気をつけながら、キャパビルをやっておられましたけれども、はたか

ら見ていますと、ちょっと上から目線というか、アメリカ・イズ・ナンバーワンというところが見え隠れしていたというのが実感として、印象として持っております。

日本の自衛隊がやるキャパビルというのは、あくまで現地目線を非常に大事にしているというのを、このアメリカの組織に行ってみて感じた次第でございます。

ちょっと話がそれましたが、経歴に戻りまして、25年間このような勤務をしつつ、随分といろいろな国外の業務にもかかわらせていただきました。国外出張ということで、ここにアメリカからバングラデシュまで並べて書きましたけども、必ず年に1回はどこかに行くという、自分で海外旅行をする必要は全くないというような状況で、非常におもしろい経験をさせていただきました。こういったものについては、ほとんどが会議の参加や訓練でありまして、最後、この下に書いてあります海外派遣、今日のお題で問われております国際平和協力にかかわる海外派遣としては、これらとは別に、シリア、東ティモール、エジプトで経験を積ませていただきました。それぞれ、シリアでは約9カ月、東ティモールで約1カ月、エジプトで約1週間と短期間でやってきましたので、今日はこれについて皆様にご紹介をしたいと思います。

まず、シリアです。平成13年1月～6月、それから、13年10月～14年1月の2回にわたりまして、連絡調整要員という肩書きで参ったものです。

最初に、当時のシリアの状況をご紹介したいと思います。平成13年、2001年ですから約15年前ですけれども、今日のシリアの状況については皆様ご存じのとおりです。ひどい内戦が起こったり、難民がヨーロッパのほうに押し寄せたり、あとは何ととっても「IS」、イスラム国が入り込んで、ひどいことになっているというのはニュースで報じられているとおりです。非常に恐ろしいキーワードに彩られた国ということで、あまりいいイメージはないと思いますが、よくそんなところでもないところに行っていたなと思われている方が多いのではないかと思います。

ただ15年ちょっと前のシリアというのは、実は、非常に静かで治安の良い国でした。信じられないかもしれませんが、私は約9カ月間、ダマスカスという首都に住みながら仕事をしていたんですが、当時、今のようになるとは全く予想していませんでした。ほんとうに見る間にとんでもないことになっちゃったというのが実感です。当時は全く問題がなかったということをもまずご紹介しておきたいと思います。

9カ月間、非常にいい思い出しかなくて、そのときによくしていただいたシリアの方々や当時訪れたところをまたぜひ訪れたい、そのうち行ってみようと考えていたんですけども、今、とてもそういう状況じゃなくなったということで、あちこちで何が壊された、何人亡くなられたというニュース聞くたびに、胸が痛むという状況であります。

もっとも約15年前、非常に安定していたとは言っても、諸外国にとってはあまりいいイメージはない国でした。ここにも出してありますとおり、当時からアサド大統領の独裁政治でありましたし、レバノンの民兵組織を支援しているとか、

化学兵器を隠し持っているというようなことが言われていまして、いわゆるならず者国家と言われたりしていました。ただ、先ほどの繰り返しになりますけども、住んで仕事をする分には全く問題がなかったというのが私の実感であります。

ここにも書きましたけども、ローマ時代の遺跡や聖書に出てくるような地形地物がそこら中に残っているような、非常に歴史と伝統のある国です。ここに写真を出してありますけども、これはイラクの国境に近い東のほうにあるパルミラというシルクロードの時代の有名な遺跡です。これは、この間イスラム国に壊されてしまいましたけど、そういうような物が残っていたり、私もよく行ったスークという市場なんですけど、何でも売っている、日本の市場をちょっと大きくしたようなものです。これなんかもセルジューク・トルコの時代に立ったようなものでして、非常に歴史が深い国でありました。

ここに挙げておりますが、宗教についてはイスラム教ということで、初めてイスラム教の国に飛び込んで私が肌で理解したのは、イスラム教というのは非常に寛容な宗教だということです。今、過激派なんかを見ていますと、あの人たちはやはり一般のイスラム教徒とは全然違います。非常に寛容で、違う価値観も受け入れるのが本物のイスラム教ということを感じまして、いい勉強になったなというところでした。

そういったようなシリアでどのような勤務をしてきたかということですが、当時、国連のPKO、国連兵力引き離し監視隊、「UNDOF」と呼ばれておりましたところに自衛隊部隊を派遣するゴラン高原国際平和協力業務というのを日本が実施しました。これは残念ながら、情勢が悪化して2013年に引き上げてしまいましたけれども、当時はまだ真っ盛りということで、実施に当たり、内閣府から派遣される在シリア連絡調整要員として勤務しておりました。

「UNDOF」については、先ほど林参事官のほうからも若干ご紹介がありましたけれども、シリアとイスラエルは何回も戦争をやっている非常に仲の悪い国ですので、両軍の停戦監視と、あとは兵力引き離し、くっつくとけんかをしますので、それを国連が力で引き離すということをやっていたんですけれども、それがちゃんと停戦して引き離されているかという履行状態を監視するため、1974年に設立された国連のミッションです。自衛隊はここに輸送部隊と司令部要員を派遣しておりました。

私は当時3佐でありましたが、何なのかと言いますと、自衛隊部隊と司令部要員、これとシリア政府の軍関係機関、在シリアの日本大使館、それと東京の関連機関との連絡調整に当たっているほか、こういったような人たちの良好な勤務環境の調整、あるいは何か必要な支援があればそれをするというような業務をしておりました。

勤務の背景ということですが、地域的に中東というところで、地中海の東の部分ですね。ワインもとれるような非常に風光明媚な高原なんですけど、さっき言ったように、シリアとイスラエルを引き離すための兵力引き離し地帯として利用されていたところでもあります。日本隊については、ここにあるゴラン高原というところのジ

ウアニ宿営地、ファウアール宿営地にいたんですが、私は連絡調整要員ということで首都のダマスカスにおりまして、そこから必要があればゴラン高原に行って、日本隊の人たちを支援するという仕事をしておりました。

勤務の状況ですけれども、主に勤務をしておりましたのはダマスカスにあるシェラトンホテルです。写真だけ見ると何て豪勢なところかと思うんですが、近くに行きますと非常にインフラ的には荒れ果てたシェラトンホテルで、他の国のシェラトンホテルと大分違うような様相です。この一室を内閣府が連絡調整事務所ということで借りていまして、見ると狭さがわかるかと思うんですが、ここで私ともう一人、内閣府のPKO事務局から来たシビリアンの方の2名体制で仕事をしておりました。この方はマギーさんというシリア人の女性です。フランスにも留学していた才媛でして、ずっと日本の連絡調整事務所の秘書として働いてくれた方ですが、今、消息不明です。非常に心配なんですけど、連絡がとれない状況です。

そういったことで仕事をしつつ、あとは、ここでもこやかに話しておりますけども、実は彼は泣く子も黙るシリア政府の情報局の人間で、業務で必要なときは、支援と言いつつ、監視任務でついてきて一緒に仕事をしていました。ただ、関係は非常に良好で、いい関係で仕事をさせていただいたと思っています。

この下の写真は、初めて陸上自衛隊から師団長が行きまして、シリア軍の師団長と懇談をするという場面を設定しました。そのような場面を設定するという仕事もしておりました。それから右の写真は、シリアはイスラム教ということで、女性が宗教的な場所に入るときは必ずフードをかぶりますので、郷に入れば郷に従えということでこのような格好をした経緯がございます。

次に、東ティモールの選挙監視要員兼連絡調整要員としての勤務、これが二つ目の私の経験ですが、平成13年の7月から9月、記憶に間違いがなければ3回ぐらいに分けて、行ったり来たりしていたような記憶がございます。

まず、当時の東ティモールの状況です。自分で撮った中から代表的な写真を拾い出して張ってみました。当時、ここに書いてあるとおり激しい内戦が起こりまして、東ティモール全土が荒廃していたような状況でした。これを見ていただくとわかるとおり、ティモールに入って見渡しますと、村がみんな焼き討ちされている状態で、燃えかすみみたいな家が残っていて、そこに人が住んでいるという、非常に内戦の爪跡が大きい状況でした。

そういう状況ですので、当然インフラ等が整っているはずもなく、野良豚がゴミをあさっているようなシーンがあったりというような感じでした。

そもそも世界最貧国の一つということで、あまりお金がありません。一般の村というのは大体こういうたたずまいで、わらで編んだような家が建っています。水道、電気も当然完備されていけませんので、村の真ん中にこういう水汲み場が一つあって、そこでこうやって汲んで家に持っていくという状況でした。

勤務の背景ですけれども、東ティモールがインドネシアから独立したと書いてありますが、国際法上はポルトガル領だったんですが、実行支配していたのがインドネ

シアで、そこから独立した後に実施された選挙で、日本が選挙監視をするということで平和協力業務を実施しまして、この際に私は内閣府から派遣される選挙監視要員兼連絡調整要員として勤務をしていました。

業務については、ここに書いてあるとおり、現地の国連の機関などとの調整、情報収集、投票所等における選挙監視、あとは一緒に行った選挙監視要員の方々に必要な支援をしておりました。

場所は、インドネシアの近く、バリ島の西にあるところです。バリ島の西といいますが、観光資源は何もないというのが当時の状況でした。

勤務の状況です。左上の船の写真は、当時、先ほど申したような焼き討ちで村がほとんど焼かれてしまった状態で、泊まる場所もないということで、タイの船のホテルが来ておまして、そこに寝泊りをして、上陸しては仕事をしておりました。

右上の写真は投票所です。このように非常につつましやかな投票所がありまして、こういったところで支援をしたというところです。これは投票所等々に張ってあったポスターなんですけども、当時、東ティモールの人は非常に識字率が低く、字が読めませんので、こういうイラストで、イメージが湧くような工夫があちこちに見られました。残念ながら私は写っておりませんが、これが選挙監視要員のチームの人たちであります。このような形で投票所を回って支援をしていたということになります。

最後に、エジプトのPKOセンターにおける講師としての勤務ですけれども、シリアやティモールと違いまして、海外のPKOセンターに行って、講師として授業をしました。そういう形で現地のPKOを支援するというのも国際協力として自衛隊はやっています。そういったことで、20年の6月に約1週間、授業を担当させていただいて、エジプトにありますアフリカPKOセンターに行ってレクチャーをしてきたものです。

このとき、アフリカはまだ自分たちでPKOができる体制にないということで、平和構築はどういうことをするのかとか、どういう着意が必要なのかということとを講義してきました。このとき聞いていた方々はアフリカの外務省、内務省、警察、軍の方でしたけれども、話をすると、アフリカの平和構築については、もちろん国連の力は非常に大切ですが、行く行くは自分たちで解決できるようにしていきたいと言っていて、意欲は並々ならぬものがあるなというのが私の感触でした。

最後、結びにかえてということで、まとめてみました。こういった変わった経験を色々させていただく中で、自分なりに心掛けたことがあります。一つは、自分は何の為にここにいるのかを常に自問しながら仕事をするということです。当然のことながら、国内で機関なり部隊なりの一員として、ある程度決まった仕事をしているのとは全く違い、こういうところに出ていきますと、現地の人や支援関係で諸外国から来ている人の中に私が一人というような状況が多々ありまして、そういうときには国内にいて仕事をするのとは全く違う自覚を持たねばなりません。変わって

いく状況を見ながら、今何をすべきなのかということを一々東京に問い合わせ、返事を待っているような時間ありません。自分で分析しながら仕事をしていく場面が多々ありました。

それと、日本人としてのプレゼンスと書いていますが、内閣府を通じて自衛隊から派遣されていたんですけども、日本人ただ一人というような場面も多々ありましたので、やはり自衛官としてというのをもさることながら、日本人としてプレゼンスを示す、日本人として貢献するというのを心掛けておりました。

それから、今回はウィメンズパワーということで、女性としてどうだったのかというところにも言及したいと思うんですけども、所見としては、これだけいろいろやった中で、女性だからという偏見とか差別等、不愉快な思いは一度もありませんでした。シリアなんかはイスラム教で、我々としてはイスラム教というやや女性蔑視の風潮があるやに認識しているんですが、そこでも一切なく、非常に気持ちよく仕事をさせていただきました。やはり与えられた任務は任務であって、別に男性だからこうする、女性だからどうするというのではありませんで、与えられたことを完遂しなければならないということでは、あまり性別は関係ないのかなと思ったところです。

さりながら、女性であることのメリットは何かといいますと、コミュニケーションにおいては非常に有利ということです。やはり女性であれば、「女性か」ということで相手の印象も違いますし、非常に緊迫した場面でも、出て行ってやわらかく話をすれば緊張がほぐれて、話すべきことが話せる状況もつくれるということで、若干のメリットはあったのかなと思っております。

こういう経験を通じて、シリア、東ティモールあるいはエジプト、アフリカ諸国といった国の平和や安定に貢献できていればいいなというところで私のプレゼンテーションを終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございます。

【司会】

中川 2 佐、どうもありがとうございました。

続きまして、お二方目、航空幕僚監部人事教育部教育課 壹岐 2 等空佐によります講演です。壹岐 2 佐、ご登壇願います。

簡単に壹岐 2 佐の経歴をご紹介しますと、平成 11 年に航空自衛隊に入隊し、美保基地の第三輸送航空隊第 403 飛行隊、小松基地第一輸送航空隊第 404 飛行隊等でパイロットとして勤務され、平成 26 年 11 月より、現職であります航空幕僚監部人事教育部教育課で勤務されております。海外派遣としては、インドネシア国際緊急援助活動等でご活躍されています。

それでは、壹岐 2 佐、よろしく申し上げます。

【壹岐 2 等空佐】

皆さん、こんばんは。現在、航空幕僚監部で勤務しています壹岐と申します。私の名前が壹岐ですので、よく長崎の壱岐出身ですかと聞かれるんですけども、私は宮崎県出身で、漢字も違います。九州では航空自衛隊の基地が限られていることでもありますので、本日、ここ長崎でお話しさせていただく機会をいただき、うれしく思います。

これまで何度か海外派遣に携わる機会がありましたので、私の経験談を幾つかお話しさせていただきたいと思います。

写真は、私が操縦していますKC-767空中給油・輸送機です。左右にしているのはF-15戦闘機です。

まず、簡単に自己紹介させていただきます。私は宮崎公立大で英米文学を専攻しまして、卒業後は国連平和維持活動、PKO勤務をしたいという夢がありましたので、パイロットを目指して航空自衛隊にしました。入隊後は、まず奈良にある幹部候補生学校で約1年間、幹部自衛官として共通の教育訓練を受けました。その後、パイロット要員として約2年間の訓練を経て、パイロットの資格を取得することができました。

初めての部隊は、鳥取県の西部に位置する美保基地のC-1という輸送機部隊で、パイロットとして約6年間勤務しました。写真は、初めて配属された部隊で乗っていたC-1という輸送機の機内です。後ろに写っているのは、上空から地上にパラシュートをつけて投下する貨物です。右隣に写っているのは、機内で貨物や乗客を担当するクルーの1人である空中輸送員です。貨物を投下するときは上空で航空機の後ろの扉を開けますので、彼は体にハーネスをつけています。

私が初めて海外派遣に参加したのは、パイロットとして勤務していた平成16年12月に発生したインドネシアのスマトラ島沖大地震の被害に対する国際緊急援助活動でした。この地震によるインド洋津波で、沿岸に位置するバンダ・アチエでは多大な被害があり、インドネシアを中心に合計約22万人以上の死者、行方不明者が出ました。国際緊急援助活動は被災国、政府または国際機関の要請に応じて、医療活動、航空機による物資、患者などの輸送、給水活動などの協力を行います。

自衛隊では、このような海外派遣をする場合の要員を前もって指定していて、普段から必要なパスポートを取得したり、定期的に健康診断を受けさせています。海外で地震や津波などが発生した場合は、すぐに現地に向かうことがあります。そのため、部隊に配属されてからは、普段から国内だけではなく海外でのニュースにも注目するようになりました。

このときは、津波が起きて派遣の可能性があることは聞いていたんですけども、出発が決まったのは当日で、午前中に上司から派遣の話を聞いて、家に帰って荷物の準備をなさいということで、夕方には部隊は出発していました。急いで家に帰って、ばたばたと出発の準備をして荷物を用意したことは今でもよく覚えています。まず何を準備しようかと考えたときに、着がえが必要だろうと考えたんですけども、派遣期間がわからなかったこともあって、どれぐらい詰めていいのかもわか

らず迷ったんですが、1週間ぐらいあればいいのかなと思って準備しました。これ以降、荷物の準備をするのがとてもうまくいったような気がします。

現地で航空自衛隊の輸送機のC-130を使用して、必要な生活用品などの物資輸送をすることになり、各飛行場でC-130の受け入れ調整をする運行支援が私の仕事でした。まず、日本からタイのウタパオ基地に向かい、ウタパオ基地を拠点として被災地であるバンダ・アチェへ物資輸送することが私たちの任務であり、ほかにも同じスマトラ島のメダンから物資輸送をすることになり、まず私はメダンに派遣要員として向かいました。

地震が起こったのはスマトラ島の西側にあるバンダ・アチェで、航空自衛隊としてはタイのバンコクの近くにあるウタパオ基地に前進して派遣の拠点としました。そこで被災地であるバンダ・アチェに貨物などを輸送しました。私は、インドネシアのメダンというところからも物資輸送があるということで、メダンに派遣されました。他にも、各自衛隊が各地に展開して援助活動を行いました。

写真は、被害に遭ったバンダ・アチェを機内から撮影した様子です。ちょっとわかりにくいかもしれませんが、津波が建物をのみ込んで、一面が土色に覆われている様子です。町全体が津波で破壊された様子を初めて目の当たりにしたときはすごくショックを受けました。初めて海外派遣に出て、周りの状況もわからないということもあり、とても不安に感じました。

通常、航空機は決まった時間に運航することが多いので、不定期に運航する場合でも、約1週間前には空港の離発着の時間や燃料補給に関する調整が必要です。ただし、このように災害が発生した場合には多数の国が航空機を運航していて、援助の人員や物資を輸送するときは大変空港が込み合い、事前の調整がとても難しくなります。よって、航空機の運航に詳しいパイロットや整備員を事前に運航する空港に配置して、航空機の受け取りや荷物を降ろす調整を事前に行います。具体的には、航空機の離発着の時間、駐機場所、燃料補給、荷物の積み込みなどです。

このような災害が発生した場合は、被災地に必要な水、食料品、生活物品などを何カ所かにまとめて、各航空機に荷物を割り振って載せます。空港の駐機場がないと、もちろん荷物を届けることができませんので、絶えず航空機が離発着しているとても忙しい時間帯の中、各航空機が自分たちの駐機場を確保します。着陸してから駐機場で余計な時間がかかりますと、他の航空機の着陸に影響を与えてしまいますので、とても気を遣いました。

調整は各国と実施する必要があったので英語を使います。直接会って細かいやりとりをするのは、ジェスチャーも使えるのでそれほど難しくなかったんですが、電話や無線を使っただけの調整のやりとりはとても難しかったです。

私はインドネシアのメダンに2週間ほど滞在して航空機の調整をした後、運航の拠点としていたタイのウタパオ基地に戻りました。それから毎回、運航を行うC-130に同乗して、空港に到着して、そこから調整を始めて離陸までの運航に関わりました。日本を出国する前はどれだけ自分が海外に行くのかわからなかったん

ですけれども、次の交代要員が来るということで、この場合は45日間で帰国しました。

左上の写真は、航空自衛隊のC-130と活動するクルーです。右下は空港で各国が活動している状況で、空港にいろいろな物資が集められています。

災害で混乱している状況で航空機の運航に携わった初めての経験でしたが、いつも決まった時間に運航する方法と違い、とても難しさを感じました。直前まで、何を運ぶのか、荷物のサイズや重さもはっきりしなかったのですが、到着のための駐機場所を確保し、その荷物をおろすところまで、各国の多数の航空機が集まる中、安全に運行できるように注意しました。状況がすぐに変化して、既に調整した事項を変更しなくてはならない状況もあったんですけれども、その場合は再調整して実施することで対応しました。

英語でコミュニケーションをとるのは苦労はしたんですけれども、現地で直接、自衛隊に対する感謝の言葉をいただいたり、また初めて各国の空軍の方と一緒に仕事をすることができて、とてもやりがいを感じました。

このインドネシアの海外派遣ではパイロットとしては実際に操縦はしていませんが、後に空中給油・輸送機のKC-767のパイロットとして、PKOでハイチに行きました。そのときはハイチで活動している陸上自衛隊の必要な貨物を輸送したんですけれども、アラスカを経由して現地に到着するまで10時間以上という長時間の運航でした。この運航で、私は初めて陸上自衛隊の現地でのハイチ復興のための施設建設などの活動を見ることができて、とても貴重な経験ができました。このハイチの運航をするまで、海外に派遣される機会は幾つかあったんですけれども、PKOという仕事に関わったのは初めてでしたので、ここで初めて自衛隊に入りたいと思った夢を叶えることができました。

写真ですが、左上が空港で一緒に運航調整をした米軍の担当者、右下がインドネシアの現地の空港職員との様子です。

次に、国際緊急援助活動やPKO以外で海外で仕事をした経験について、少しお話ししたいと思います。

航空自衛隊は、平成24年7月にイギリスで行われたエア・ショーに、初めてKC-767を地上展示しました。このロイヤル・インターナショナル・エアタトゥーは世界最大規模の軍用機のエア・ショーと呼ばれていて、多数の航空機の地上展示や飛行展示が行われています。

ここでは、イギリスでの航空機の受け取りから、地上展示が終わって航空機が日本に帰るまでの調整を行いました。これは何カ月も前から調整されていた行事だったので、現地で初めから調整を行わなくてはならない国際緊急援助活動とは異なり、調整は比較的難しくなかったです。航空機より先にイギリスに入って順調に準備を進めることができ、日本から10時間以上かけてイギリス入りした自分の航空機を迎え入れることができたときは、とてもうれしかったです。

写真の左上がちょうど航空機が到着したところで、この日は珍しくとても天気が

よかったです。右下が地上展示の直前の航空機の様子で、ステップをつけて機内の展示も行いました。展示期間中は航空機の説明の手伝いをしました。この展示では、埼玉県にある入間基地の太鼓部もKC-767に搭乗してイギリス入りし、エア・ショーのイベントの中で演舞を披露し、注目を集めて、日本の文化を広めることに貢献しました。また、多くの日本からの観光の方やイギリス在住の日本の方々に地上展示に来ていただき、航空自衛隊の航空機がイギリスを訪れることはめったにないということもあり、皆さんに喜んでもらえたのがとても印象的でした。

最後に、海外での訓練に参加した経験についてお話しします。

航空自衛隊は、毎年アメリカのアラスカで行われている米空軍の演習に参加していて、例年7月から8月に約1カ月間行っており、隊員は約300名、航空機は戦闘機、輸送機、空中給油機が参加しています。訓練内容は、前日までに内容を決めて、訓練日の朝からその日の訓練のためのブリーフィング、飛行訓練、降りてからのフィードバックのためのブリーフィングの流れで、この期間は毎日フライトをしています。いつも飛んでいる国内での訓練環境と異なりますので、アラスカ上空の飛び方やルールを事前に勉強することが必要でした。

最後になるんですけども、これはKC-767のコックピットから空中給油を受けるF-15とKC-767を撮影したものです。このアラスカでの訓練は短期間ではありましたが、集中して共同訓練ができる貴重な機会です。学ぶことがたくさんありました。

以上で、私の海外派遣に関する経験談は終わりです。限られた時間ではありましたが、私の話が少しでも皆さんに伝わり、自衛隊の活動に理解を深めていただければ嬉しく思います。今日はお時間をいただき、どうもありがとうございました。

【司会】

壹岐 2 佐、どうもありがとうございました。

引き続き、第1部を含めた講師の方々への質疑応答に移りますが、会場をセットしますので、少々お待ちください。

(会 場 設 営)

それでは、ここからはご来場の皆様のご質問を受けたいと思います。第1部を含めまして、講師の方々に対するご質問のある方は、係員がマイクを持ってまいりますので、挙手をお願いします。なお、ご質問の際には、まずどなたに対するご質問かを発言の上、ご質問をお願いします。

【質問者】

本日は3名の方、感銘深い話をありがとうございました。私から二つ質問がございます。一つ目が林参事官、二つ目が中川 2 等陸佐、壹岐 2 等空佐です。

一つ目の質問が、能力構築支援が新しい武器輸出三原則と関係があるか、ないか。関係があれば、教えていただける範囲で教えていただきたいと思います。なぜかといいますと、マスコミで新しい武器輸出三原則が国際信頼を失うんだという宣伝がなされていたので、もし関係するのであれば、これだけ意味のあることなんだということを、教えていただけないかと思います。

二つ目が、海外派遣において、男女の任務の差はありませんけども、女性の特性として非常に意味があるということを言われたんですが、おそらく海外の軍隊の中にも女性の軍人さんがいたかと思うんですが、もし、日本の女性自衛官と海外の女性軍人のここが違うんだと、ここがなでしこならではなんだというところがあれば、そういったところも教えていただければありがたいなと思います。

以上です。よろしく願いいたします。

【林参事官】

ご質問ありがとうございます。武器移転三原則ですね。先般、新しく武器輸出、禁輸の方から移転をするという方針に変わったこととの関係のご質問でしたけれども、能力構築支援について、関係するかと言えばしますし、関係しないかと言えばしません。何故かといいますと、能力構築支援は技術、能力を提供しますので、そういう意味ではソフトです。去年10月に新しくできました防衛装備庁が行っています装備協力は、まさにハードの面です。そういう意味では、ハードとソフトというのは全く違う意義づけのあるものだという事です。

安倍総理は、色々なところで、能力構築支援と防衛装備・技術協力とODAを組み合わせて各国との協力関係を構築していこうと言っています。装備・技術協力と能力構築支援が組み合わせによって、関わりがないことはないと思います。

もちろん、装備・技術協力というのは、その装備・技術を提供することで、国際的な平和と安定を構築するという大きな目的のためになされるものですので、協力するためには、NSCや政府全体で、その技術・装備が相手国に移転することが、国際平和に貢献するかを見ているわけです。将来、もしそういうことが起きましたら、それを能力構築支援で、引き続きその国との関係を続けていくという事はあり得るかとは思いますが、ただ、今のところそういうものもありません。最初申しましたように、能力構築支援はあくまでもソフト、装備・技術協力はハードというような切り分けがなされているということです。

【中川 2等陸佐】

二つ目にいただいたご質問に関して、なでしこならではということではありますが、自分の経験を踏まえると、シリアにせよ、東ティモールにせよ、エジプトにせよ、実は女性の軍人が全くいないか、いても非常に少数といったようなところで業務をさせていただきました。

それで、なでしこはともかく、日本から女性の自衛官として派遣をされて仕事を

する場において、例えばエジプトでは、先程ご紹介したように、講師として平和構築について皆さんの前でレクチャーをするという機会を与えていただきました。エジプトはイスラム教ですので、女性の社会的地位はあまり高くないんですけれども、そういう背景を踏まえて、たしかエジプトの内務省かどこかの女性だったと思いますが、私のところに来て、「同じ女性が制服を着て、みんなの前で教官として話されている姿を見て、同じ女性として非常に誇らしく思います」というようなことをおっしゃってくれて、エジプトに来た甲斐があったなというような、非常にいい言葉をいただきました。

そういう意味ではモチベーションというか、インセンティブというか、お手本とまではいかななくても、こういうこともできるんだという一つの例を示させていただいたのかなと思っております。

【壹岐2等空佐】

私の経験なんですけれども、日本の女性は小柄なこともあり、米軍の人を例えに出すのはどうかとは思いますが、一見女の人とわからないような体格の人が多いです。ただ、男性と同様に荷物を軽々と運んでいたりするところは、私たちに欠けているところかなと思います。

日本の航空輸送に限って言えば、結構、他国の人は荷物を荒々しく扱ったり、がさつなところがあるなと思ったんですけれども、日本の場合はちゃんと決められたところに場所を確保し、そこに置いて、その後のこともちゃんと考えて輸送を実施していたと感じました。なでしこに限ったことではないとは思いますが、この点については日本の方が誇れるのかなと実感しました。

【質問者】

日本は、ロボット工学が非常に発達している国だと思いますが、ロボットをそういう現場で使われるというお考えはいかがでございましょうか。それと、ドローンという、いわゆる無人機が非常に発達しておりますが、災害とか海外での防衛問題で、適応していくというのも非常に意義のあることではないかと思うんですが、その点はいかががお考えでしょうか。林参事官からご回答いただければと思います。

【林参事官】

さすが技術が進んでいるというか、長崎らしい先見性のあるご質問だと思います。ロボットの活躍というのは、あると思うんですけれども、まだまだ自衛隊でロボットの技術というのは進んでおりません。

来年度の予算で要求しているのが、災害救援で、先程、壹岐さんからも話がありましたけど、物を軽々と持ち上げられるようなボディースーツみたいなものの研究です。人間は要るんですけれども、身につけると二倍の力が出るようなスーツができないかという研究を技術研究本部などで始めています。ですが、まだまだロボット

をこういう活動に活躍させるというところまでは行っていないのが現状です。

ドローンにつきましても、人が行けないようなところで活躍していくというのは当然あると思います。防衛省もドローンの導入を去年から考えております。ただ、これも防衛省でドローンが運用できるような体制にはまだなっていないのが現状です。将来、そういうところに力を入れていかなくتهはいけないというのは、色々なところで指摘されていますので、今、技術開発や導入などを始めているという状況です。

【質問者】

林参事官にお尋ねしますが、ちょっとユニークな質問ですけれども、職務上の個人的なことでお尋ねしますが、毎日の新聞で総理大臣の動静を見ていると、防衛関係では、このところ、防衛大臣よりも防衛政策局長が総理大臣に説明に来る機会が多いようですね。それで、国政政策課というのは、その中でも中枢にあると思いますけれども、そういうときに参事官として、急いでこういう資料を集めてくれとか、官邸に行くのについてきてくれとか、そういうことはないのでしょうか。

それから、国会やいろいろな委員会で防衛大臣に質問がありますけれども、そのときに後ろからメモを渡す役目もあるようですね、林さんはそういう経験はないのでしょうか。お願いします。

【林参事官】

二つ質問がありまして、最初の防衛大臣、防衛局長が官邸によく行くというのは、この何年増えてきていると思います。総理の日誌が、新聞に出ていますけれども、それにもうちの局長がよく出ていると思います。大臣も閣議など、緊密に調整されていて、先程も申しましたように、安倍総理が海外に行くときに、防衛省として上司と私がついて行くことが多くなっています。というのは、各国との首脳会談の第一が、安全保障に関することが多くなっているからです。私自身は、最近、出張や海外との調整が多く、今年になって7カ国に行っています。これからはずっと出張等が入っており、今は国内の説明に行くというような担当にはなっていません。ただ、防衛省からはいつも緊密に説明に行かせていただいています。

国会でのメモ出しというのがありましたけれども、メモ出しというか、国会で正確に議論を進めるということがとても大切なことですので、私も若い頃は、国会に張りつきまして、必要であればサポートするということは、多々しております。今も我々のスタッフがそういうことを続けています。

【質問者】

今日は貴重なお話、どうもありがとうございました。

中川2佐と壹岐2佐への質問になります。海外での派遣の任務で、海外の方々といろいろな連絡調整等を経験されたと思うんですけれども、日本での連絡調整の仕

事と海外で行う連絡調整の仕事にどのような違いを感じたのかということと、それに対して、どのようにうまく処理をしたか、また心掛けたことを教えていただければと思います。よろしく願いいたします。

【中川 2 等陸佐】

お答えします。大分あちこちに行って、国連の方、現地の政府の方、軍の方、民間の方、いろいろ調整をしましたけれども、日本における日本人とのコミュニケーションと何が違うかといいますと、一番はやはり英語だということですね。英語なんですけれども、こちらも向こうも母国語ではない英語を使って調整する中で、どうしても、英語力の不足というよりは、言葉に対する理解の違いで何か認識が行き違ったり言葉足らずだったり、あとはそもそも文化が違いますので、感覚的な時間の捉え方とか距離感なども全部違ってきますので、思ってもいないところから自分で言ったのと違う意味にとられてしまうということが多々起こります。

ですので、私が気をつけていたのは、まず、とにかくフェイス・トゥ・フェイスで調整をすることです。当初は、メールでも電話でも構わないと思うんですが、とにかく車を出し、あるいは自分の足で稼いでフェイス・トゥ・フェイスでやること。それも言葉だけでは、「あの時、こう言ったじゃないか」ということになりますので、必ず書面で残すこと。メールで構わないと思うんですけども、必ず書面で残して、そこでもう一度しつこいと思われようが、最初にそれで相当痛い目に遭いましたので、回を重ねるごとに教訓として踏まえて、文字で残すことで間違いがないよという着意をしておりました。

【壹岐 2 等空佐】

私の経験も、今、中川 2 佐が話されたことがそのまま当てはまっていて、他にありかなと考えたときに、やはり英語を使うからだと思いますが、まず結論を先に述べます。何がしたいということ、初めにダイレクトに話をし、その後に理由を言うというところが、相手にインパクトを与えて、スムーズにいくということがありました。私も結構足を使い、顔を覚えてもらうことに一生懸命になったことをよく覚えています。

【司会】

予定の時間が参りましたので、以上をもちまして、質疑応答を終わらせていただきます。講師の皆さん、どうもありがとうございました。

これをもちまして、第 3 1 回防衛問題セミナーを閉会させていただきます。

なお、冒頭でも言いましたが、お手元のアンケート用紙につきましては、今後の業務の参考とさせていただきたいと考えておりますので、ご記入の上、出口に設置しております回収ボックスか、当局のスタッフに渡してもらっても構いませんので、ご協力の程よろしく願いいたします。

本日は長時間にわたりご聴講いただき、どうもありがとうございました。

— 了 —